

II 章 普天間公園（仮称）に求められる導入機能の検討

II 章 普天間公園（仮称）に求められる導入機能の検討

本章では、I 章での検討を踏まえ、導入可能性のある機能を具体的なイメージとして示す。

1. 万国津梁の舞台となりうる施設のイメージ

(1) 大芝生広場のイメージ

1) 人を惹きつける美しい空間のイメージ

①のびやかな広がり景

スケールの大きな芝生広場は多くの人に好まれる風景であり、広場が都市のシンボルとなっている例も少なくない。

人が広がり景を好む理由は諸説あるが、自然景観には癒し効果（自然の回復的効果）があることが認められており、視界いっぱいに緑が見通せる広场景観はおのずから魅力的な存在といえる。

また、人が自分を取り巻く環境に抱く 2 つ根源的な欲求として、「理解」と「探索」があるといわれる（注1）。「理解」はまとまり、秩序、調和などの要素からなり、芝広場はまさしくその代表的な風景である。なお「探索」は複雑さ、ミステリー性の要素であり、境界性のある下町の風景などが挙げられる。都市景観は複雑な要素であふれており、そういった中に明快な広場空間があることで、より都市が魅力的な空間となる。

（注1）参考：景観心理学への進化論的・現象学的アプローチ—環境心理学ノート—渡辺恒夫（情報コミュニケーション学研究 2016 年第 16 号）



写真上：広がりそのものが人を惹きつける風景。中央の大木が求心性を高める。昭和記念公園

写真左：対比をなす「探索」の空間。意図的に見通しを遮り、変化を楽しませる庭園デザイン。芝恩賜公園

②市街地とのコントラストと連続性を併せ持つ空間

普天間公園（仮称）は、高密な中南部都市圏において他にない大規模オープンスペースとなり、機能面でも景観面でも特別な存在となる。

市街地の真ん中に立地する大芝生広場は、都市の喧騒や日常となった過剰な刺激から隔絶され、緑に囲まれた空間となる。樹林の向こうに林立する市街地のビル群とは、機能的にも視覚的にも強いコントラストを形成し、印象的な景観をつくることになる。

また、普天間公園（仮称）は、中南部都市圏の市街地に立地することで、駅など交通拠点からの快適で便利なアプローチが期待される。都市と一体化し、常に賑わう広場もイメージすることができる。

このような都市との連続性は普天間公園（仮称）の魅力の一つとなるが、大芝生広場が上に述べたようなオアシス的な存在であるためには、都市との間に緩衝空間を設けて一定の距離を置く必要もある。なお、駅前など市街地と連続する場には小広場を別に設けることで、大芝生広場と機能分担しつつ、多様な使い方ができる活気にあふれた公園の創出が考えられる。



東京都心部のオアシス、新宿御苑



駅前の立地を生かし、都市と連携した多様な催事が行われている日比谷公園

③魅力的な大芝生広場の先例

大芝生広場が都市のシンボルとなり、都市をブランディングする存在になっている例を挙げる。



N.Y.セントラルパークの顔となっているシープ・メドウ(広場)。約 7ha



ハイドパーク(ロンドン)



奈良公園



イマーム広場(イスファハン)

2) 大スケールならではの交流を可能とする場のイメージ

広場は、基本的に自由な空間であり、他者を尊重しながらも「やりたいことができる」場、そしてそこに他者との交流が生まれる場である。

入ってはいけないのではと思わせる権威ではなく、座りたいから始まり、何かをしたいという思いを呼び起こすしつらえをつくる。

また大きな広場は、小さな広場ではできないことを可能にする。

そのひとつとして、国を越えた文化交流や地域振興につながる大規模な野外音楽イベントの開催を想定する。

そのためには、市街地との距離や位置関係に留意するほか、周囲に音や光を軽減する樹林帯を配置するなど、十分な配慮も必要である。

広場とともに、屋内または半屋内で人が集まれる空間を隣接させると、交流空間の使い勝手をより良くし、魅力を高めることが期待される。



国営ひたち海浜公園での野外フェス(写真:Rock in japan 公式 HP より)



広場と野外劇場の組み合わせ。
メルボルン、シドニー・マイヤー野外音楽堂



動かせる椅子が公園内の多様な活動を呼び起こした。
ブライアントパーク(N.Y.) (写真:公式 HP より)

(2) 花修景のイメージ

万国の人々を惹きつける要素として花がある。大規模な花と緑の空間は大きなインパクトを有し、癒しの空間となる。

全国の国営公園でも花修景が人気を呼んでいる実績もあるが、沖縄という場合は、亜熱帯性気候という環境を生かして幅広い植物を育成できる大きな可能性を有する。普天間公園（仮称）においてもシンボルの一つとして花の空間を展開することが考えられる。

沖縄は台風など厳しい気象条件、雑草との競争の厳しさなどもあるが、温室栽培が低コストでできるという利点、栽培技術の蓄積、地域農家との連携などを生かし、沖縄ならではの魅力ある花の施設の創出に可能性があるといえる。



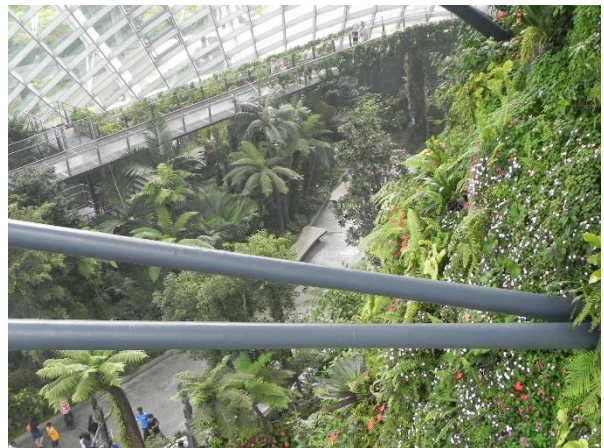
いちめんのネモフィラ。国営ひたち海浜公園



質の高い植物デザインで人気を集めている「奇跡の星の植物館」。兵庫県立淡路夢舞台温室



世界からの観光客が訪れる名所となった大規模植物園、ガーデンズバイザベイ。シンガポール



(3) 自然史ミュージアムのイメージ

普天間飛行場一帯は琉球石灰岩台地に立地する。琉球石灰岩は、沖縄の代表的な風土・文化を形成する基盤となっており、沖縄の環境の典型を示すのに最適な場といえる。また、沖縄は生物多様性のホットゾーンといわれており、自然史の収集・研究・展示のための施設の充実が待たれるところである。

一方、国内では国立自然史博物館の設立の機運が高まっており、平成 28 年には日本学術会議が国立自然史博物館設立の必要性和題する提言書を出し、その中で適地として南西諸島を挙げている。

国立自然史博物館は、日本のみならずアジア圏を網羅することも想定され、世界の研究者や観光客の交流の場ともなる施設であり、万国津梁のシンボルとなりうる。



ロンドン自然史博物館。世界有数の研究拠点であり、都市のシンボルのひとつともなっている。

【国立自然史博物館設立の提言】

地球環境を人為的破壊から守り、人類の存続をはかるといふ究極目的を果たすために取り得る重要手段として、60 年近く前からの学術会議の主張を引き継ぎ、世界の自然史科学を先導する国立自然史博物館を日本が設立すべきである。国立自然史博物館は、新しい運営・研究体制を敷く研究教育拠点として、地球環境の変遷を様々な時間・空間スケールで記録している大量の自然史標本と自然史データを収集・整理・継承・活用し、生物を含む地球環境変遷の研究を刷新・強化・加速する。さらに、その研究成果から地球環境との調和を取り戻す自然観を新しく構築してその普及をはかると共に、地球環境を守るための様々な応用研究や政策立案に貢献する。設立地は、自然環境が南北で大きく異なる国土と、予想される東南海地震による標本喪失のバックアップ等を考慮し、日本列島の南部と北部の双方が望ましい。

「提言 国立自然史博物館設立の必要性」(平成 28年5月17日、日本学術会議)より引用

(4) 水のフィールドパークのイメージ

対象地はゆたかな地下水を抱え、下流のタイモ畑を潤している。また、地下水とともに鍾乳洞が発達しているといわれる。沖縄の風土や生活文化を育んだ「水」は、当地にとって重要な要素であり、この地下水や水の循環を保全していくことは普天間公園（仮称）や跡地利用のテーマのひとつにもなっている。

しかし、地下水という特性上、人々の目に触れる機会がなかなかなく、意識されづらい。そこで、地下の水を想起させるようなランドスケープを公園内に創出し、シンボル性と快適さ、楽しさを併せ持つ「水のフィールドパーク」を整備することが考えられる。

水が地表に現れる場の具体イメージあるいはモチーフとして、伝統的な樋川（カー）が挙げられる。また、洞窟をそのまま活用して見せる例としては、沖永良部島の鍾乳洞（ケイビングツアー）などがある。一方、多くの人々が容易に水に触れ楽しめる空間としては、インパクトのある景観を有する水の遊び場がイメージされる。



石灰が凝固してできた水の絶景、パムッカレ。アート性の高い水の空間の可能性を示唆する(トルコ)



沖縄を代表する水の風景、樋川



鍾乳洞そのものを体験できる空間(沖永良部)



水に親しめる遊び場の例

2. 沖縄のアイデンティティ（シマの基層）を継承・発信する舞台のイメージ

（1）「琉球・沖縄庭園」のイメージ

「日本庭園」は、我が国の代表的な歴史文化、芸術のひとつと考えられているのは間違いないといえる。

そこで、日本庭園が我が国でどのように発展し、それを我が国としてどのように海外に発信してきたかをみる。そして、現在、国営公園等の整備のなかでどのようなものがあるのか、整理する。また、「琉球庭園」というものが日本庭園の歴史等のなかでどのように形成され、どのような特徴があるといえるのか把握する。これらのことは、「シマの基層」を表現する場をイメージするにあたり、大いに意義あるものとする。

1) 日本庭園の海外への発信と、国営公園等における日本庭園整備の内容と特徴

「日本庭園」は、我が国の代表的な歴史文化、芸術のひとつと考えられているのは間違いないといえる。日本庭園の形は、そもそも奈良時代に海外（中国大陸）からもたらされた文化の影響を強く受けたものだったが、「平安時代になり国風文化の隆盛とともに、日本独自の庭園の形が洗練されていく。公家文化中心の平安時代から、武家文化が台頭し主導的な立場となる鎌倉～室町時代には、既に日本庭園の形が完成していた。」（注1）16世紀後半ごろから日本を訪れたキリスト教宣教師等によりヨーロッパに紹介されるが、「17世紀に始まる江戸時代の鎖国により、わずかに長崎のオランダ商館員（ケンペル、シーボルトなど）を通じ、主に植物の情報がもたらされるだけの時期が続いた。」（注1）

このため、我が国の日本庭園について、海外に一般に広く知られるようになるのは、明治期以降である。本格的な日本庭園が海外に知られるのは、1873（明治6）年のウィーン万国博覧会に明治政府が日本庭園を出展したことから始まる。それは、神苑風庭園で、社や鳥居を中心にもつものであった。この後の1876（明治9）年フィラデルフィア万博、1878（明治11）年パリ万博等、継続して欧米の万博に、様々な美術工芸品などともに、日本庭園が出展され、「19世紀末からの欧米におけるジャポニズムのブームを引き起こした。」（注1）こうして、19世紀末以降、現在まで、日本造園学会の調査によれば、海外における日本庭園の総数は、約430件以上（注2）にのぼるといえる。

（注1）出典：鈴木誠「海外につくられた日本庭園の系譜」海外の日本庭園、日本造園学会、2006年3月、pp.1-8

（注2）出典：鹿野陽子「海外の日本庭園：傾向と分析」海外の日本庭園、日本造園学会、2006年3月、pp.9-10

以上の状況等を踏まえると、我が国を代表する歴史文化、芸術のひとつといえる「日本庭園」を整備、紹介することは、我が国の魅力をアピールする強力な手段ともいえる。

そこで、我が国を代表する歴史文化、芸術のひとつといえる「日本庭園」を、江戸・明治期以前の歴史的、文化財的な庭園ではなく、我が国の歴史文化等を踏まえつつ、現代の状況等を生かしながら日本庭園を整備した事例を、これまでの国営公園等において整理すると、万博記念公園の日本庭園と国営昭和記念公園の日本庭園がある。それらの概要等は次のとおりである。

①万博記念公園日本庭園

日本万国博覧会は、昭和45年3月から9月までの半年間、大阪府吹田市ほかで、人類の英知と創造力を結集した世界の祭典として、また、内外の人々に現代の各国の科学と文化に対する理解と関心を高め、戦後20数年を経て、めざましい発展をとげた我が国の姿を広く各国の人々に伝え、国際的地上を向上を示すことなどを目的に、我が国で初めて開催した国際博覧会である。そのなかで、日本国政府の出展として日本庭園が整備された。日本庭園は、日本の造園技術の粋を集めて造られ、博覧会当時は、林立する近代建築パビリオンの未来空間と対比して、自然・緑の憩いの場を提供する役割を果たしていた。庭園面積26ヘクタール、東西1,300メートル、南北200メートルの細長い地形に水の流れを造り、西から東に向かって流れるせせらぎに沿って、上代から中世、近世、現代へと4つの造園様式が取り入れられている。また、庭園の設計は、水の流れに人類の進歩と時の流れを象徴させ、全体として調和のとれた一つの作品を作ることも意図されている。万博終了後、万博会場は大蔵省（現財務省）所管の日本万国博覧会記念協会が記念公園として管理し、日本庭園も存置した。その後一般に供用され、現在に至る（ただし、全体の管理運営は、現在は大阪府に移管している）。



【主な施設】④深山の泉(みやまのいずみ)、⑤木漏れ日の滝(こもれびのたき)、③竹林の小径(ちくりんのこみち)、⑥千里庵の枯山水(せんりあんのかれさんすい)、②松の洲浜(まつのすはま)、①心字池(しんじいけ)、⑦つつじヶ丘、⑧旋律の鯉池(せんりつのこいけ)

図出典：万博記念公園日本庭園ホームページ：<https://www.expo70-park.jp/facility/japanese-garden/>

②国営昭和記念公園日本庭園

国営昭和記念公園は、昭和天皇御在位五十年記念事業の一環として閣議決定された口号公園で、総面積は180ha、現在約95%の169.4haが一般に開園されている。本公園は、「緑の回復と人間性の向上」をテーマとして、豊かな緑に囲まれた広い公共空間と文化的内容を備えた公園とすることを目標としている。このなかで、日本庭園は、代表的な修景施設として、日本の伝統的文化を継承する場、人々がコミュニケーションを深める語らいの場、さまざまな伝統的文化活動も行える場として整備されている。中心には大きな池を造り、西側の岸には「歓楓亭」、その南側には「清池軒」と、庭のたたずまいに対応した建築が配されている。「歓楓亭」は銅板葺

き木造平屋建ての数寄屋建築で、中では本格的な茶会が味わえる。また、歎楓亭からの庭園の眺めは、左手に緑深い山がそびえ、その間からせせらぎが池に流れ込み深山の趣を呈し、対して右手は池畔の大きなアカマツを中心に、穏やかな空間が広がっている。園路は回遊式で、池の周辺をめぐるにつれて刻々と変わる景観を楽しめるよう整備されている。



図出典：国営昭和記念公園日本庭園ホームページ：http://www.showakinen-koen.jp/facility/facility_garden/

また、万博記念公園日本庭園、国営昭和記念公園日本庭園の概要を比較し把握すると、次の表のように整理できる。

図表 公園内日本庭園の概要

施設名	万博記念公園日本庭園	国営昭和記念公園日本庭園
整備年度	昭和42～44年度(約3か年)	平成4～8年度(約4か年)
開園年月日	昭和45(1970)年3月15日	平成9(1997)年4月17日
規模・面積	面積約26ha、東西約1,300m、南北最大約230m	約6ha
様式	回遊式庭園	池泉回遊式庭園
事業費	約22億円	約25億円
全体の構成・特徴等	<p>日本政府出展の万博の中心となる出展物としての施設(日本庭園)として整備(もう一つが総合的な展示館(日本館))。敷地全体が細長い土地で西から東に傾斜し、西側に水源を置き東に向かって谷間を流れ、平野に至る感じの水流を配して「流れ」を主題として構成。</p> <p>上流(西端区)に上代、中流(溪谷)に中世、下流(中央区)に近世とそれぞれの時代のイメージを生かし、最下流(東端区)では「あす」の庭園を意図。</p>	<p>山水をあしらった築庭技法など、伝統的な庭園技術を生かしながらも、歴史庭園にみられる縮景の手法ではなく、広がりのある明るい景観と四季の季節感を表現した池泉回遊式庭園。</p> <p>茶室を備えた本格的な公共の日本庭園としては、国営公園で初めてのもので、後世にまで残る庭園となることが期待されている。</p>
主要施設	<p>西端区には、寝殿造りの迎賓館、常緑針葉樹を密植し深山の景観を創り、平安時代をイメージ。溪谷区は、鎌倉・室町時代の庭を表現、休憩所や茶室。石庭の起源をイメージする景観。中央区は、日本庭園の成熟期である江戸時代初期の近世風庭園、日本庭園の主庭であり雄大な池と芝山で構成。東端区は、現代から未来につながる新しい時代の庭園。観魚池、蓮池、菖蒲田など水生、水辺植物を主に、池周辺傾斜地には花壇を設置。</p>	<p>池、滝、流れ、木橋、集会棟「歎楓亭」、休憩棟「清池軒」、滝見四阿「涼暮亭」、四阿「昌陽」芝生広場</p>
テーマ・基本方針等	<ul style="list-style-type: none"> ・万博のテーマ“人類の進歩と調和”にふさわしいものとするため、自然と人間の調和ある世界を創造する ・地形を利用した「水の流れ」を基調とし、この流れに人類の進歩と時の流れを象徴する ・日本庭園がたどってきたそれぞれの時代の特徴的手法を取り入れ、しかも現代な感覚による新しい庭園として造園する ・万国博覧会会場の憩いの場とすると同時に日本の誇りうる造園技術を展示する 	<ul style="list-style-type: none"> ・我が国の伝統的な造園技法を駆使する ・現代のニーズに応じた価値の高い庭園とする ・池泉回遊式庭園とし、自然を範とする明るい庭園とする ・配置、配色等細部に至るまで丁寧な工法により、後世まで残るような庭とする
その他の特徴	<p>万博終了後は、万博記念公園として整備、管理され、日本庭園も存置、その後、一般に開園</p> <p>庭園設計は、日本公園緑地協会と阪神造園建設業協同組合。主任設計者は、田治六郎(1904-1978)。日本の造園家。内務省等で公園緑地の設計、整備等を担当、大阪市公園課長等を歴任。農学博士。万博日本庭園では設計、施工指導にあたった。</p>	<p>皇太子殿下ご成婚記念事業の一環として整備着手</p> <p>庭園設計は、小形研三(1912-1988)。ワシントン日本大使館茶庭、ブリスベン国際博覧会日本庭園など、国際的にも多くの日本庭園を手がけた、昭和期の代表的な庭園家。</p>
特記	<p>伊藤ていじ他著「探訪日本の庭〔別冊2〕現代の名庭」(1979、小学館)では、戦後最大の日本庭園と紹介されている。</p>	<p>第13回都市公園コンクール(設計部門)で、建設大臣賞受賞</p>
引用文献・参考資料等	<ul style="list-style-type: none"> ・通商産業省(1971)日本万国博覧会政府公式記録、p.151 ・通商産業省(1971)日本万国博覧会政府出展報告、pp.247-322 	<ul style="list-style-type: none"> ・建設省関東地方建設局(2000)国営昭和記念公園工事事務所20周年記念誌、pp.95-98 ・建設省国営昭和記念公園工事事務所(1997)国営昭和記念公園日本庭園がオープン「公園緑地」第58巻2号、pp.32-37

2) 「琉球庭園」の内容と特徴把握

「琉球庭園」について、一言で定義しているものは少ない。しかしながら、ここでは、既往著書、文献等からその内容、特徴についてできる限り明らかにし把握することとする。

- i. 本中^{もとなかまこと}真 (現内閣官房産業遺産の世界遺産登録推進室参事官、農学博士。専門は造園学・景観学。2015年3月まで文化庁主任文化財調査官。国の文化財指定や富士山・平泉をはじめとした日本の世界文化遺産登録に携わる。現在は、葦山反射炉をはじめとした、明治日本の産業革命遺産の保存管理に携わる)は、1980年発行の「造園修景大事典 第8巻」(1980、同朋舎出版)、の「琉球庭園」の項目を担当し、以下のように記述している。

「琉球は、室町・桃山時代から中国、日本、朝鮮、南洋諸島との交易が発達し、文化交流も深かった。庭園においても、その反映を受けて、各々の国の形式、技法が取入れられて融合されている。

代表的な大名庭園、識名園など2, 3を除いては、全般的に小規模な住宅庭園であり、時折、庭石に文字が彫刻されていることがある。これは中国からの冊封使との文芸交流の所産であり、その他の石組の構成や表現形式にも中国文化との深いつながりが見られる。鹿児島県の知覧町に存在する庭園群には、こうした庭石に文字の彫刻されたものはないが、灯籠や、石材の用い方にも類似する点があるところから、両地庭園の間には密接なつながりがうかがえる。

また、庭園の地割様式は、本土伝統のものであるがサクラ、ヤナギなどの日本の庭樹や、大和石などの本土の庭石が珍重されている。その他、石灯籠、石塔などは朝鮮風のものである。

第2次世界大戦の災禍により、崎山御殿(御茶屋御殿)を初め、首里城内・城下に数多くあった王家・王族の庭は、邸宅とともに壊滅し、現存するものは数えるほどしかない。それらはいずれも江戸時代後期の作庭である。」

出典: 造園修景大事典編集委員会編「造園修景大事典 第8巻」1980、同朋出版社、p210

- ii. 吉川^{よしかわ まつ}霽 (1916年 - 1995年。造園学者、庭園史家。研究は発掘庭園史をテーマに戦後、東京大学助手後、昭和26年から文化庁にて一貫して庭園の調査研究、文化財遺構の発掘調査・復元整備に尽力。師の吉永義信と共に精力的に全国を巡り、幾多の名園を実測調査、記録・報告)は、同書において以下のように述べている(「造園修景大事典 第8巻」(1980、同朋舎出版)、pp.197~200、「琉球の庭園」の項目記述)。

「琉球の庭園文化は、琉球の他の芸術文化と同様に特有の魅力にあふれたものである。それはほぼ17世紀に始まり、19世紀初頭に盛行したもので、主として尚王家の居城である首里城およびその周辺一帯の王族や高級家臣の邸宅につくられた。そのほかに石垣島や宮古島でも頭^{かしらしよく}職(庄屋のような職分)やそれに相応する役職を持った人の邸宅につくられている。(中略)

首里一帯の庭園の多くは、中国本土からの冊封使の接遇のために作庭された。冊封使団は

数か月の滞在中に中国の多くの文芸を琉球にもたらしたが、庭園のなかの石に文字を彫り、庭を題材にした詩文を残すなどの中国趣味をもたらした。しかしこれらの庭園の基本様式は、内地の伝統を踏襲した地割を持っていて、決して中国の庭園趣味を再現したものではない。庭石が現地産のサンゴ石灰岩であるため、太湖石による「疊石為山」かと思わせるが、決してそうではない。識名園は広島市の泉邸（縮景園）に酷似し、石垣島の石垣氏庭園・宮良氏庭園（いずれも枯山水）は、築山庭造伝所載の京都勸持院庭園の構成に則っている。これらは内地と琉球の作庭手法の交流を物語るものである。（以下略）」

出典：造園修景大事典編集委員会編「造園修景大事典 第8巻」1980、同朋出版社、pp.197～200

- iii. ^{もり おさむ}森 蘊（1905 - 1988。造園史家、庭園研究家。元奈良国立文化財研究所建造物研究室長、文化庁文化財保護審議会専門員、工学博士）は、「日本史小百科『庭園』」のなかの「沖縄の庭園群：沖縄の特色を示す作庭」において、次のように「琉球庭園」を日本の庭園史の一つの特徴として把握することの重要性を指摘している。

「沖縄列島で庭園の見るべきものを物色するならば、比較的面積の大きな本島・石垣島・宮古島などに着眼するとよい結果が得られると思う。那覇市は現在沖縄県庁の所在地であるが、昔はその市内の首里には王城があり、王城内の識名園をはじめ数多くの名園がそこに集っていた。（中略）日本本土を遠く離れ、しかも年に数回、内地では想像もつかないほどの風水害に見舞われるこの一帯ではあるが、庭園の諸材料の違いや、その取り扱い方の相異などにも、見落せない要素が多分に存在する点でも、日本庭園史としては是非取り上げねばならぬものであるといえよう。」

出典：森蘊著「日本史小百科〈庭園〉」1988、小学館、pp.308

- iv. ^{よしながよしのぶ}吉永義信（1894 - 1985。庭園史家、元文部省史蹟名勝調査員、東京家政学院教授、農学博士）が、「琉球庭園」の「むすび」において以下のように述べている

「わたくしは1932（昭和7）年と33（昭和8）年との2回に、鹿児島県鹿児島市吉野町の仙巖邸庭園（中略）などを調査し、それらの庭園に他の地方では見られない、中国庭園の性格に近い特殊な石組を見て、奇異の感に打たれたのであった。そのころ薩摩と中国との間に、特別な文化的関係があったとも考えられず、鹿児島県下における地方的特色と思っていた。ところがその後、琉球庭園を調査するに及んで、それが琉球庭園の影響によるものであることを理解したのである。薩摩藩と琉球国とが政治上、通商上に密接な関係があったのは、さきに述べた通りであって、大和の文化は琉球に輸入され、琉球の文化は大和に将来された。とくに慶長の役以後、琉球国は薩摩藩の属国の立場にあり、琉球と薩摩との文化的交流はいっそう強調されたに違いない。作庭にあたっては同様に、薩摩の庭園は琉球の庭園に影響し、琉球の庭園は薩摩の庭園に反射的に影響したのである。」

出典：吉永義信著「琉球庭園」、丹羽鼎三記念出版会編：日本文化としての庭園様式と本質、1968、誠文堂新光社、pp.86－105

また、吉永義信は、戦前に「識名園」の調査を二度行っているが、特に、昭和 16（1941）年 6 月、文部省の囑託として派遣され、識名園を詳細に調査し文部大臣に復命している。これに基づき、昭和 46（1941）年 12 月、当時の史蹟名勝天然記念物保存法により、国の名勝に指定されている。その時の復命書では、識名園について「かように保存の点からみてかほどまでよく状態を保存している庭園は少ないと言ってよい。庭園は作庭形式から江戸時代に発達した大名庭に属している」と報告している。

識名園の戦後の修復復元も、この時の調査が原点であり、後述する現在の識名園の復元に結実している。

v. 「識名園」について

「琉球庭園」の代表的庭園である「識名園」の概要を把握する。

ここでは、那覇市教育委員会のホームページから引用すると以下のとおりである。

「識名園（俗にシチナヌウドゥンと呼ぶ）は、琉球王家最大の別邸で、国王一家の保養や外国使臣の接待などに利用されました。1799 年につくられ、1800 年に尚温王冊封（さっぽう）のため訪れた正使（せいし）趙文楷、副使（ふくし）李鼎元（りていげん）を招いています。

王家の別邸としては 1677 年、首里の崎山（さきやま）村（現在の首里崎山町）に御茶屋御殿（ウチャヤウドゥン）がつくられました。現在の首里カトリック教会がある所です。首里城の東に位置したので「東苑（とうえん）」とも呼ばれ、その後につくられた識名園は、首里城の南にあるので「南苑（なんえん）」とも呼ばれました。

識名園の造園形式は、池のまわりを歩きながら景色の移り変わりを楽しむことを目的とした「廻遊式庭園（かいゆうしきていえん）」です。「廻遊式庭園」は、近世に日本の大名が競ってつくるようになった造園形式ですが、識名園では、「心」の字をくずした池の形（心字池）を中心に、池に浮かぶ島には中国風あずまやの六角堂や大小のアーチが配され、池の周囲には琉球石灰岩を積みまわすなど、随所に琉球独特の工夫が見られます。

識名園はかつて、春は池の東の梅林に花が咲いてその香りが漂い、夏には中島や泉のほとりの藤、秋には池のほとりの桔梗（ききょう）が美しい花を咲かせ、「常夏（とこなつ）」の沖縄にあって、四季の移ろいも楽しめるよう、巧みな配慮がなされていました。

1941 年（昭和 16 年）12 月 13 日に国指定「名勝」となりましたが、1945 年（昭和 20 年）4 月、第 2 次世界大戦の沖縄戦で破壊されました。1975～96 年（昭和 50 年～平成 8 年）総事業費 7 億 8 千万円をかけて復元整備され、1976 年（昭和 51 年）1 月 30 日国指定「名勝」、2000 年（平成 12 年）3 月 30 日に国指定「特別名勝」となりました。

2000 年（平成 12 年）12 月 2 日には、ユネスコ世界遺産（琉球王国のグスク及び関連遺産群）として登録されました。

指定面積は 41,997 平方メートル（約 12,726 坪）で、そのうち御殿（ウドゥン）をはじめとするすべての建物の面積は、合計で 643 平方メートル（約 195 坪）となっています。」

出典：那覇市教育委員会ホームページ

<http://www.city.naha.okinawa.jp/kakuka/kyouikubunkazai/bunkazai/shikinaen.html>

- vi. また、識名園の復元を担当した古塚達朗（那覇市教育委員会）によれば、識名園の庭園技法にみられる中国の影響について以下のように指摘している。

「明代末期から清代の初期にかけて、中国にはじめて造園論を述べたものが現れる。その代表ともいべきものが、1631（崇禎 4）年、松陵（江蘇呉江）の計成が著わした『園治』である。『園治』は、もっぱら造園理論を展開した専門書で（中略）、理論的な要素と実的なマニュアル的性格を兼ね備えている。（中略）例えば、『園治』に見られる都市部の狭い空間を活かす方法の一つである、門径を敢えて屈曲させて奥行感覚を増幅させる手法や、框景と呼ばれる、窓枠を額縁に見立てた中に庭園の景色を取り入れる中国独特の手法などが、識名園にも反映されており、後世においてつくられた庭園とはいえ、その片鱗をうかがうことができる。」

出典：古塚達朗(2000)：名勝「識名園」の創設(上巻)～琉球庭園の歴史～，ひるぎ社，pp.56-57

以上から、「琉球庭園」は、地理的、気候的、歴史的な条件等から、琉球の他の芸術文化と同様に特有の内容を有しているといえ、室町・桃山時代から中国、日本、朝鮮、南洋諸島との交易が発達し文化交流も深かったが、基本的に日本の庭園様式を取り入れこれを踏まえつつ、各々の国の形式、技法が取入れられて融合して表現され、独自の材料、植栽、表現等から“琉球らしさ”ともいべき独特の景観、特徴を有した庭園といえる。

また、江戸時代という時期を考えれば、鎖国の本土が直接に海外の影響を受けずに日本庭園を発展させてきたのに対して、「琉球庭園」は、本土の大名庭園を基本にしつつ、当時の中国文化を吸収しつつ独自に発展し、薩摩等にも影響を与えたという歴史的特異性も指摘できる。

3) 新たな「琉球・沖縄庭園」の機能創出と提案

造園分野では庭園の作り方を大別すれば、整形式庭園と自然風景式庭園の二つに分けられる。また、日本の庭園は、回遊式、枯山水、露地（茶庭）という三つの様式が基本といえる。

現在の沖縄における「琉球庭園」の取り組みについては、かつての歴史的資産、文化財としての復元、または復元に重点が置かれ、現代によみがえらせ、後世に引き継ぐという、文化財としての姿勢であるといえる。

このため、「新たな琉球庭園」の創造、創出に貢献し、“現代の名庭”ともいべき新たな『琉球・沖縄庭園』の作庭に至ったものがないともいえる。一定程度の面積等規模を有し、全体に琉球・沖縄の庭園としての造園の技術、特徴が表れ、琉球・沖縄の文化・芸術を体現し、世界に誇れるような、また、琉球・沖縄の将来への貴重な財産として引き継げるような新たな庭園空間の創造が期待される。

加えて、近年日本の盆栽文化が世界から注目され、人気を博している。沖縄も盆栽が盛んであるといわれるが、展示や発信の拠点となる場が少なく、庭園とあわせた活用が期待できる。

こうした点から、新たな琉球・沖縄庭園は、普天間公園（仮称）に導入する機能としてふさわしいものといえる。

※ 引用文献・参考文献

本文で引用、参考としたもの以外も含む。

- 1) 吉永義信(1968):「琉球庭園」日本文化としての庭園-様式と本質-, 丹羽鼎三記念出版会、誠文堂新光社、pp.86-105
※本論文は、「家政研究」東京家政学院短期大学研究年報第3号、1959(昭和34)年、pp.36-45の再掲である。
- 2) 本中真(1980):「琉球庭園」日本造園修景大事典第8巻, 同朋舎出版, p210
- 3) 吉川需(1980):「琉球庭園」日本造園修景大事典第8巻, 同朋舎出版, pp.197-20
- 4) 吉川需(1972):「沖縄の庭・伊江殿内(いえどんち)庭園」庭, 第3巻, 建築資料研究社, pp.77-78
- 5) 吉川需(1995):「琉球庭園と識名園」庭, 第103巻, 建築資料研究社, pp.56-59
- 6) 藤田宗義・仲程路芳(1995):「沖縄の古庭」庭, 第103巻, 建築資料研究社, pp.76-79
- 7) 古塚達朗(2000):名勝「識名園」の創設(上巻)～琉球庭園の歴史～, ひるぎ社, pp.1-227
- 8) 古塚達朗(2000):名勝「識名園」の創設(下巻)～琉球庭園の歴史～, ひるぎ社, pp.228-471
- 9) 小口基実(1979):「琉球・薩摩の庭園」小口庭園グリーンエクステリア
- 10) 森蘊(1988):日本史小百科・庭園, 東京堂出版, pp.1-431
- 11) 那覇市市民文化部文化財課(2018):世界遺産・国指定名勝「識名園」パンフレット

(2) 歴史文化資源、自然資源を現在に生かすフィールドミュージアムのイメージ

普天間飛行場跡地には、接收されていたことで開発を免れた資源も残されており、普天間公園(仮称)はこれらの資源を含むエリアを想定している。ここでは、公園利用者が「シマの基層」に触れ、沖縄の文化を感じられるような整備活用のイメージを検討する。

1) 集落遺構等の活用整備のイメージ

【保存復元タイプ】

- ・東側エリアには、戦前の集落遺構や御嶽、カー、古墓など庶民の生活空間を構成する一連の資源が残されている。この中から、代表的かつ保存状態の良い遺構群を整備し、ムラの生活を追体験できるような展示を検討する。
- ・現在でも地域住民が拝みの対象として手入れを続けているカーなどは石積み構造物などを保存修理し、周辺環境やアクセスを整える。



カーを修復、整備する案。「宇宜野湾産泉保存整備マスタープラン報告書」平成15年4月、宇宜野湾郷友会より

【体験展示タイプ】

- ・集落遺構としては道や石積み屋敷囲いが残っている。県内で民家や集落を展示する施設には、海洋博公園の沖縄郷土村、琉球村があるが、どちらも古民家の移築によるものである。また集落全体を保存した場所としては、重要伝統的建造物群保存地区に指定された竹富島や渡名喜島があるが、人々の生活空間であるため現代に合わせた改変もなされている。当地の集落遺構は、戦前の姿をそのまま残すことが貴重であり、この特性を生かしてできる限り現存遺構を利用しながら、空間構成がわかるよう整備を図る。案として、VR (Virtual Reality。「仮想現実」と呼ばれ、主に完全なCGで仮想現実の世界をつくり出す技術)を用いたフィールドミュージアム展示を想定する。



凸版印刷株式会社運営サイト「ストリートミュージアム」より
(<http://www.streetmuseum.jp/index.html>)

【保全タイプ】

- ・丘陵及び谷部分は、御嶽や古墓が点在し、植生としても自然環境が最もよく残されている場である。自然環境の拠点であり、集落を抱護する存在として、必要な調査等を除き、できる限り

そのまま維持することが望ましいと考える。ただし、フィールドミュージアムの重要な要素であることから、これらを眺め、遥拝のできる視点場を確保する。

2) 残存樹林の活用整備のイメージ

- ・東側の自然度の高い樹林は、丘陵地形や遺構群とともに保全を基本とし、環境への影響を考慮した遊歩道を整備する。
- ・西側の樹林は二次林が主体となっている。また、ギンネム林など多様性に乏しく在来植物を圧迫する可能性のある群落も分布している。今後、自然度や樹林の状態、生物の生息空間としての状況を調査した上で、具体的な方針を定めなければならないが、基本的な方針としては、良好な自然環境を保全しつつ、人が自然に親しめる空間の整備を図るものとする。
- ・ゾーニングとして、自然保全を優先するゾーン、林間部の利用を前提とした疎林ゾーン、草地ゾーン、修景ゾーンなどが想定される。
- ・整備にあたっては、できる限り在来種を活用し、周辺の自然植生に調和する形で緑の質を高めていく。また、残存樹林を中心に緑のネットワークを強化していくことが普天間飛行場跡地全体で求められるが、緑化をより充実させるためには、施設整備の際に周辺緑化を行うのではなく、早期に苗木などによる基盤的緑化を進め、本格的な施設整備に入る際には環境林が十分生育しているような手法をとることが望ましい。
- ・公園内の緑は一様ではなく、様々な質や種類の緑のパッチワークとなる。また、跡地は全体に平坦な地形が多くなるが、その中で公園は大地の起伏を生かし、ランドマークや変化をつくりあげる役割を担う。
- ・大規模公園のスケールを生かし、園内を回遊する散策ルートを整備する。丘、森、谷、市街地に隣接する並木道など、多様な緑の風景を楽しめる大回廊は公園の一つの名所となりうる。



サザン・リッジズ（シンガポール）。複数の公園を繋いでいる全長遊 9km もの遊歩道。